

思いや意図をもって試行錯誤しながら表現できる小学校音楽科指導
—音楽を形づくっている要素を分析し、グループで練習する活動を通して—

豊明市立大宮小学校での実践

- 1 主題設定の理由
- 2 研究の方法
- 3 研究の実際
- 4 研究の考察
- 5 今後の課題

第7分科会
音楽教育

澤下 了輔 (愛知・(長久手)東小)

研究の概要報告

本年度もコロナ禍は続き、授業をする上でさまざまな配慮を求められることとなった。そのような中でも、できないことに焦点をあてるのではなく、「何ができるのか」に重きを置き、「ピンチをチャンスに」と前向きに発想を転換した実践が多く報告された。

討論では、二つの視点を柱にすすめられた。一つめは、「基礎・基本の定着をはかり、子どもの学びを深めるための協働的な学習のあり方」二つめは、「コロナ禍における教育のあり方」について意見交換がなされた。その中で、キーワードとなったのは、「音楽を形づくっている要素」「言語活動とグループ活動」「郷土の音楽」「音楽づくり・創作」である。

まず、「音楽を形づくっている要素」については、実践の中にも参考となる事例が多くみられた。「気持ちカード」「自分だけの音楽辞典」「話型の提示」など、定着化をはかるため、それらの学びを今回限りで終わらせることなく、継続的に学びを積み上げられるようにしていくことが大切であると確認し合った。また、小学校・中学校と9年間を見据えて、指導にあたることの大切さについて再確認した。

次に、「言語活動とグループ活動」については、対話的活動、協働的な学びの視点からも重要であり、どの教科、領域においても必要な力である。音楽科においても、思いや意図を表出したり共有したりする時に、説明する力が必要となる。特にコロナ禍における言語活動は、少人数でのグループ活動になることによって、知っていることを伝え合ったり、足りない部分を補い合ったりするなど、子どもどうしのかかわりの中で、互いを高められる場面が多くみられるようになったとの意見が出された。ただその中で、多くの実践者が、言語活動を充実させるための「方法」や「手段」が、「目的」となってしまわないように意識していることも分かった。やはり、言語活動においては、今後も継続して、その手だてを検討していく必要があることを確認し合った。

今回の実践報告には、音楽科の授業を横断的な学習にうまく位置付けた「郷土愛」をもたらす実践も多くみられた。コロナ禍で中止となった地域の祭りについて、地域の方をゲストティーチャーとして招き、お囃子や歴史に触れ、街のルーツを知っていく活動が報告された。さまざまな発見があり、子どもたちが主体的に動く姿がそこにあった。その中で、音楽科でしかできないアプローチがあり、音楽科だからこそできる強みがあること知り、わたくしたち教員にも新たな発見があった。

最後に、コロナ禍における音楽教育のあり方ともかかわりが深い「音楽づくり・創作」についても触れた。ICTの導入は、地域によって使用アプリ、導入時期に違いはあるものの、ICTを使った音楽づくり、創作は、全く新しい授業の展開を可能にしたといえる。音楽科において、最終的には、音で確かめる作業が求められるが、ICTの導入により、音で試すという技能面の苦労が緩和されたことは言うまでもない。それは、①作った曲を聴き合う ②言語活動を通して、思いを伝え合う ③音声で確かめ、試行錯誤を繰り返すといった学習過程が可能となった。ICTの効果的な活用については、わたくしたち教員が積極的に取り入れ、授業における活用の可能性を広げていくことを確認し合った。

音楽科は、どのような時代であっても、人とのかかわりの中で学びを深められる教科であり、心に寄り添える教科であることを共通認識し、分科会が閉じられた。

今後、本教育研究で論じられたこれらの成果をさらに深めていきたい。主な課題は以下の2点である。

- 他教科・領域、地域の特色と関連させた音楽教育のあり方
- ICTの活用と協働的な学習のあり方

(川合恒之・斉藤玲子)

報告書のできるまで

第71次教育研究愛知県集會に、14本のレポートが提出された。これらは、第70次までに積み上げられた課題にもとづいて、各分会から、各単組の研究集會を経て高められたものである。新型コロナウイルス感染症が拡大する中において、さまざまな感染対策を講じたり、音楽の授業のあり方を工夫したりするなど、音楽の授業を通してどんな子どもを育てるのか、めざす子どもを育てるために身につけさせるべき力とは何か、めざす子どもを育てるための基礎・基本の指導方法や教材選択のあり方についての手だてや工夫が多数報告された。

この報告書は、長久手市立東小学校・澤下了輔教諭が、「思いや意図をもって試行錯誤しながら表現できる小学校音楽科指導 ―音楽を形づくっている要素を分析し、グループで練習する活動を通して―」の実践研究を単組集會・県集會での報告や討論を参考にし、次の諸先生方の指導を得て、作成したものである。

助言者	川合 恒之 (名古屋音楽大学)	斉藤 玲子 (名古屋・上社小)
教育課程研究委員	井上 裕弓 (豊川・国府小)	前田 麻紀 (名古屋・鳴海東部小)
	福田 純也 (名古屋・守山中)	長瀬 麻美 (稲沢・祖父江中)
	寺澤真智子 (知教連・阿久比中)	土屋 堇 (西尾・吉良中)
	辻 真理子 (蒲郡・蒲郡北部小)	後山あかね (名古屋・丸の内中)
	中島 明子 (豊田・逢妻中)	

1 主題設定の理由

大宮小学校児童は、音楽の授業に意欲的にとりくむことができ、元気よく生き生きと歌うことができる児童が多い。児童の一部には、よりよい発声をめざそうと自ら考えて歌うことができる児童もみられる。特にピアノなどの楽器を習っている児童については、音程感覚がしっかりしており、リコーダー演奏などの器楽の分野においても、スムーズに学習にとりくむことができる。学年にかかわらず「元気よく歌う」ことを最優先にとりくんでいるため、意欲的に歌うことについてはよい方向に働いていると感じる。反面、教員主導の場面が多く、自分で考えてよりよいものをめざそうとする児童は一部である。多くの児童が与えられた課題にとりくむが、音色や音程をはじめとして、自分が出す音はどうなっているかを考えながら活動することは少ない。

また、日常の学習活動では、題材となる楽曲に関する文章表現において、楽曲そのものの説明や、よりよく表現するための工夫を説明する上で、語彙力不足に起因する表現力の弱さを感じる。そこで、児童の現状を把握するために、学習カードを用いた調査(N=41)を実施した(資料1)。音楽を説明する際に使う言葉の多様性に関する質問(問1)では、本来使うべき「音楽を形づくっている要素を表現した言葉」を使っている児童は少数であった(資料2)。「音楽を形づくっている要素」とは、音楽を特徴付けている要素としての「音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズなど」と、音楽の仕組みとしての「反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係など」のことであり、学習指導要領に定義されている。アンケートに書かれた文章を分析してみると、

「音楽を形づくっている要素」で表現した言葉が約25%、「歌詞がよい曲」や「元気が出る曲」といった感想表現が約75%という結果だった(資料3)。次に、実際に曲を聴いた場合の実態も把握するため、また扱ったことのない教科書掲載の曲(「広い空の下で」)を視聴した後に、同様の説明を求めた(問2)。

【資料1 学習カードを用いた調査】

音楽の授業に関するアンケート

()年()組()番名前()

① あなたが音楽(曲)について説明するとき、どんな曲だと説明しますか。説明する言葉を書いてみましょう。具体的に曲名をあげて説明してもよいです。その場合、曲は何でもよいです。音楽の授業で知った曲でも、普段家で聴いている音楽でも、何でもよいです。具体的に曲名をあげなくても、どんな曲かを説明する言葉をなるべくたくさん書いてみましょう。

② 曲「
」について、どんな曲ですか、説明しましょう。

③ 曲「
」について、音楽を形づくっている要素を使って、「〇〇(要素)が△△な(説明)曲」という言い方で説明しましょう。グループで出た意見も書きましょう。

(自分の意見)

(グループで出た意見)

④ ③で出た意見をもとにした練習を終えて、あらためてこの曲がどんな曲か、「〇〇(要素)が△△な(説明)曲」という言い方で説明しましょう。

【資料2 音楽を形づくっている要素を表現した言葉を使った記述】

第1回 音楽の授業に関するアンケート

① あなたが音楽(曲)について説明するとき、どんな曲だと説明しますか。説明する言葉を書いてみましょう。具体的に曲名をあげて説明してもよいです。その場合、曲は何でもよいです。音楽の授業で知った曲でも、普段家で聴いている音楽でも、何でもよいです。具体的に曲名をあげなくても、どんな曲かを説明する言葉をなるべくたくさん書いてみましょう。

<明るい曲>

- 明るくて、リズムがきびきびする
- 速くて、高い音が多く、音が軽い
- 音が大きい

<暗い曲>

- ・ 暗くて、リズムがおそい
- ・ 音が低くて、二拍子、半拍の拍子が多い
- ・ 音が小さい

その他

- だんだん大きくなる、小さい、大きい
- 急にリズムが変化する [おどろく]

○ 静かだった曲が急に大きくなる

【資料3 質問紙調査結果】

問	内容	要素を使った回答	感想表現
1	音楽を説明する際に使う言葉	25%	75%
2	「広い空の下で」を説明	24%	76%

ここでも、「明るい」「優しい」といった感想表現が多かった(資料4)。「音が高い」「ゆっくりな」「速い」といった、曲想が理解できているのが把握しづらい回答も散見された(資料5)。この傾向は音楽的素養の有無にかかわらなかった。このことは、児童の多くが、「音楽を形づくっている要素」を意識した表現ができない可能性を示唆していると考えられる。

【資料4 感想表現の回答】

【資料5 曲想の理解が把握しづらい回答】

2 曲「」について、どんな曲ですか、説明しましょう。「広い空の下で」
 ○友達が大変なことかわかる曲
 ○自分と友達の友情や出会ったことかわかる
 ○2番は友達に会う前のような感じ
 ○音のこぼれ思い出したことをしゃべっているような歌

2 曲「」について、どんな曲ですか、説明しましょう。「広い空の下で」
 この曲はとても明るくて聞きやすい曲です。
 この曲はリズムがとってもよくて弱くかかっています。
 2 曲「」について、どんな曲ですか、説明しましょう。「広い空の下で」
 声が高くゆっくりする曲。
 やさしく小さくともでも聞ける曲。

研究をすすめる上で、校内において「音楽を形づくっている要素」についての共通理解をすすめている。その中で、児童が「音楽を形づくっている要素」を正しく認識することは、児童が楽曲を客観的に分析するための基準をもつことであると確認された。この点において、児童による分析は、その楽曲にはどのような特徴やよさがあるかをよりよく理解することにつながり、その楽曲を演奏する上での留意点にもなりうると考える。

大宮小学校では、新学習指導要領が求めている主体的・対話的な学びをすすめて深い学びへとつなげていく手段としての、協働的な学びについて実践研究を行っており、ペアやグループでの活動を積極的に取り入れている。本研究においても、協働的な学びを取り入れる。具体的には、ペアやグループで、楽曲のよさをいかした表現の仕方を工夫する。その過程で、「音楽を形づくっている要素」を意識した言葉を使っていくことで、よりよく楽曲を表現できるようになると考える。

2 研究の方法

(1) めざす児童像

- 楽曲のよさを協働で分析し、「音楽を形づくっている要素」を適切に使って、言葉で説明できる児童
- 「音楽を形づくっている要素」を使った楽曲の説明をもとに、そのよさをよりよく表現するための歌唱方法を試行錯誤しながら練習できる児童

(2) 研究の仮説

めざす児童像の実現のために、以下のように仮説を設定する。

【仮説1】 「音楽を形づくっている要素」としての言葉とその意味を習得して、それらを用いて楽曲を説明できれば、適切に楽曲を分析することができるであろう。

【仮説2】 グループで練習する場面において、「～(思いや意図)のために○○(要素)を△△(工夫)してみよう」といった、話型を使うことで、よりよく協働的に楽曲練習をすすめることができるであろう。

(3) 研究の手だて

ア 手だてI 要素の意識化と楽曲分析を可能にする話型の定着

(ア) 要素の意識化を可能にする手だて

「音楽を形づくっている要素」を子どもたちに定着させるため、要素カードを作成した。意識させたい要素を視覚的にも把握できるようにする。これらの要素カードで明示した語彙は、学年にかかわらない内容であることから、児童だけでなく、すべての教員もこれらの要素を意識できるように、音楽室に常に掲示し、誰でも日常的に活用できるようにする(写真1)。

(イ) 話型を定着させる手だて

楽曲を分析する場面において、それぞれの要素が、実際に鳴っている音の何の部分を表しているのかを個人やグループで検討させ、「○○(要素)が□□(分析)なので、～(感じたこと)である」という話型にもとづいて説明させる。

イ 手だてII 話型を用いた協働学習

グループで歌の練習をする場面において、ただ繰り返し歌うだけでなく、どこをどのように工夫して歌うことが音楽のよさをよりよく表現できるようになることか、児童どうして話し合いながら歌う。その際、「～(思いや意図)のために〇〇(要素)を△△(工夫)してみよう」という話型を常に意識する(写真2)。

(4) 検証計画

事前と同様に、事後にも質問紙調査を行った(資料6)。前後の記述の変容に関して、「音楽を形づくっている要素」を用いた記述を量的に分析する。あわせて、話型の効果について、記述内容の変容から質的に分析する。とりくみの中で変容するに至った要因について検討する。対象学年は6年生41人とする(資料7)。

【資料6 事後調査】

音楽の授業に関するアンケート
()年()組()番 名前()

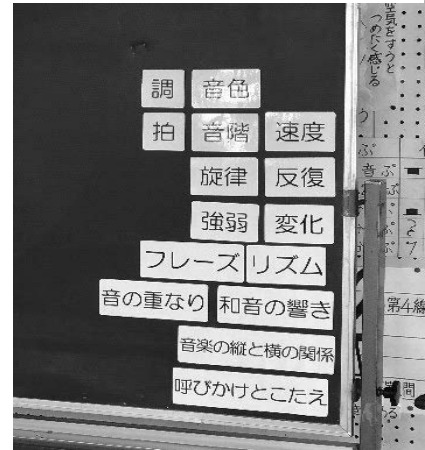
① あなたが音楽(曲)について説明するとき、どんな曲だと説明しますか。説明する言葉を書いてみましょう。具体的に曲名をあげて説明してもよいです。その場合、曲は何でもいいです。音楽の授業で知った曲でも、普段家で聴いている音楽でも、何でもよいです。具体的に曲名をあげなくても、どんな曲かを説明する言葉をなるべくたくさん書いてみましょう。

② 曲「大切なもの」について、どんな曲ですか、説明しましょう。

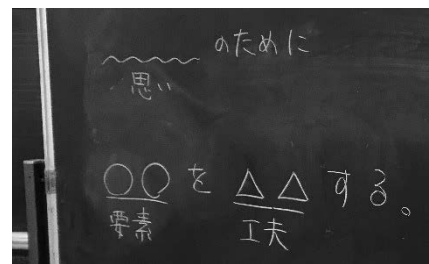
【資料7 対象学年 実施単元計画】

対象学年	小学校6年生41人
実施単元①	曲想を味わおう 「広い空の下で」 「まっかな秋」
実施単元②	心の歌 「ふるさと」

【写真1 要素カード】



【写真2 様式化した話型】



【資料8 学習カード】

音楽の授業に関するアンケート
()年()組()番 名前()

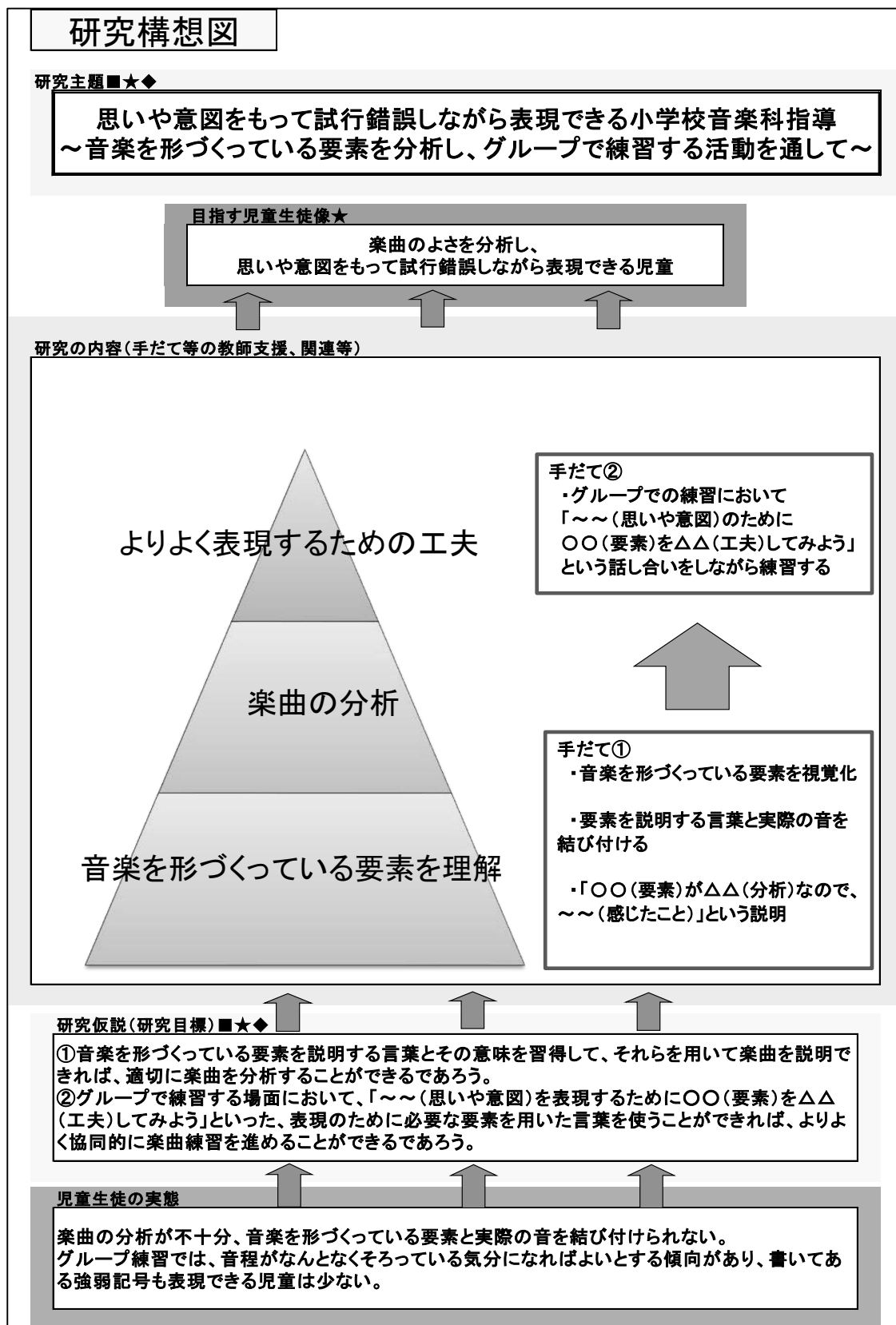
① あなたが音楽(曲)について説明するとき、どんな曲だと説明しますか。説明する言葉を書いてみましょう。具体的に曲名をあげて説明してもよいです。その場合、曲は何でもいいです。音楽の授業で知った曲でも、普段家で聴いている音楽でも、何でもよいです。具体的に曲名をあげなくても、どんな曲かを説明する言葉をなるべくたくさん書いてみましょう。

② 曲「 _____ 」について、どんな曲ですか、説明しましょう。

③ 曲「 _____ 」について、音楽を形づくっている要素を使って、「〇〇(要素)が△△な(説明)曲」という言い方で説明しましょう。グループで出した意見も書きましょう。
(自分の意見)
(グループで出した意見)

④ ③で出した意見をもとにした練習を終えて、あらためてこの曲がどんな曲か、「〇〇(要素)が△△な(説明)曲」という言い方で説明しましょう。

(5) 研究構想図



3 研究の実際

(1) 手だてⅠ 要素の意識化と楽曲分析を可能にする話型の定着

ア 要素の意識化を可能にする手だてを用いた授業実践

(ア) 実践方法

「曲想を味わおう」の第2時において、「音楽を形づくっている要素」について、要素カードを見せ、それぞれの要素の意味を説明した。その上で、学習カード第2問で扱った楽曲「広い空の下で」について、「○○(要素)が□□(分析)な曲」という言い方で説明する第3問にとりくませた。(資料8-3)

(イ) 実践結果

学習カードに「強弱が高い」や、「音色が低い」という記述が32%みられたことから、「音楽を形づくっている要素」を使って楽曲を理解しようとする児童の意図がみられた。しかし、要素と要素を説明する言葉が適切に結びついていないような記述もみられた。また、「旋律の音が高い曲」や、「強弱が強い曲」などという記述も35%みられた。これらは、楽曲全体を表現した言葉ではなく、楽曲のある一部分の特徴を表現した言葉にすぎない。児童は、自身が強い印象を受けた楽曲のある一部分しか説明することができず、楽曲全体を表現した言葉をなかなか見いだせないようだった。

イ 話型を定着させる手だてを用いた授業実践

(イ) 実践方法

3(1)アの結果をふまえ、強弱と旋律の音の動きについて意識をむけさせて説明をさせることで、話型を定着させることにした。教材として、5年生の教材である「まっかな秋」を用い、クレシェンドとデクレシェンドの付き方について、なぜそのような表現の工夫がなされているのかを考えさせた。その工夫について考えさせることで、「強弱」と「旋律」といった「音楽を形づくっている要素」を用いて楽曲を分析できるようになり、そのことが要素どうしを関連付けて表現の工夫を考える際の助けになるだろうと考えた。

また、実際の音をもとに考えさせるため、話し合いだけでなく、楽譜上の記載がクレシェンドの部分はデクレシェンドで、デクレシェンドの部分はクレシェンドで歌ってみることで、楽譜どおりに歌ったときとの差を考える体験も取り入れた。楽曲の分析や表現の工夫を考える際には、実際に「歌う」(演奏する)という活動が伴うということも意識付けできると考えた。

(イ) 実践結果

楽譜どおりの強弱の付け方の方がよいと感じる児童が88%であったが、なぜその方がよいのか問いかけてみると、「なんとなくその方がいい気がする」などの答えが多く、説明できる児童は少なかった。そこで「旋律の音の動きを見てごらん」と声をかけた。すると「音が上がっていくときにクレシェンド、下がるときにデクレシェンドになっている」とつぶやいた児童がおり、その意見に多くの児童が共感している様子だった。

そこで、授業者から、「旋律の音が高くなるときに、強弱は強くなっていく」と、「音楽を形づくっている要素」どうしを関連付けた説明をすることで、要素の意味を理解するとともに、その使い方の理解をすすめた。説明後、その使い方を確認するために、「旋律」という要素を使って曲を説明する言葉を作ってみようとして投げかけた。「旋律の音が高く(低く)なっていく」「旋律の音がなめらかに上がっていく(下がっていく)」「旋律の音が急に高く(低く)なる」という意見が出た。児童の中には、「旋律」「強弱」「変化」という三つの要素を用いて、楽曲の特徴を「旋律の音の高さと強弱が一緒に変化していく」と表現した児童がいた。この感想に対して、多くの児童が共感している様子がみられた。また、手だてに対するねらいとは異なる意見であるが、「楽譜を見ているだけより、歌った方がわかりやすい」という児童のつぶやきも聞かれた。

(2) 手だてⅡ 話型を用いた協働学習

ア 表現の工夫を試行錯誤させる授業実践

(ア) 方法

6年生教科書掲載の「ふるさと」を用いて、強弱記号などをすべて消した楽譜を準備した。二声の音程を確認し、まずは強弱を考えさせた。強弱が出そろったところで、「この曲のよさを強調するには、どう工夫して歌えばよいらうか」という課題を与えて、グループで練習させた。

(イ) 結果

ここまでの学習がいかされ、意欲的に歌いながら強弱を考えることができ、実際の楽譜とほぼ変わらない

強弱を当てはめているグループがほとんどであった。実際の楽譜と違う強弱を書き込んだグループについても、「旋律の音の動きをもとに考えました」という意見があり、自分たちなりに「音楽を形づくっている要素」をもとに、実際に歌って音にしながらかえることができていた。

始めのうちは、要素を意識して「強弱の変化をはっきりさせよう」「旋律の音が切れないように歌おう」という意見が出ていた。しかし、しばらくすると、工夫を考える上での意図や思いと「音楽を形づくっている要素」とを結び付けた意見が出ないままに練習がすすめられていた。なぜ強弱の変化をはっきりさせるのか、なぜ旋律の音が切れないように歌うのかという目的が忘れ去られ、表現方法のみを試行錯誤する様子が見られた。

イ 話型を用いた協働学習の授業実践

(ア) 方法

アと同じく、グループで「ふるさと」をよりよく表現するための工夫を考えさせた。その際に「～(思いや意図)のために、○○(要素)を△△(工夫)してみよう」という話型を示し、この話型を用いて楽曲を表現させた上で、練習にとりくませた。

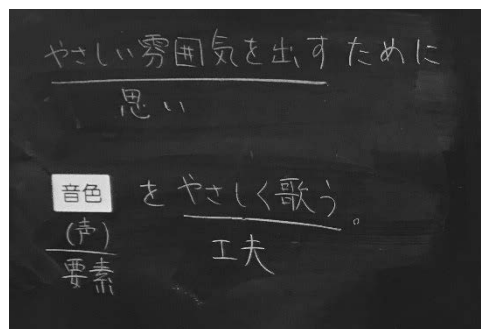
(イ) 結果

最初は、思いや意図の部分にどのような言葉をあてはめるのか分からない児童が多かった。しかし、「要素の分析をもとに考えると、この曲の特徴、よさは何だろうか?」と再度問いかけたところ、「田舎の雰囲気」「静かな景色」「優しい雰囲気」などの言葉が出始めた。やがて、「優しい雰囲気のために、音色を意識して歌う」という声が上がった。そこで、「意識して」をもっと分かりやすく言うように指示したところ、「優しい雰囲気のために、音色を優しく歌う」という話型に沿った表現ができた(資料9)。それを全体に紹介したところ、他にも「和音の響きを整えるために、旋律の音程を正しく歌う」「なめらかに歌うために、旋律の音をつなげて歌う」「いなかの風景、のんびりした雰囲気を出すために、音をのばして歌う」という話型を意識した表現ができるようになった(資料10)。

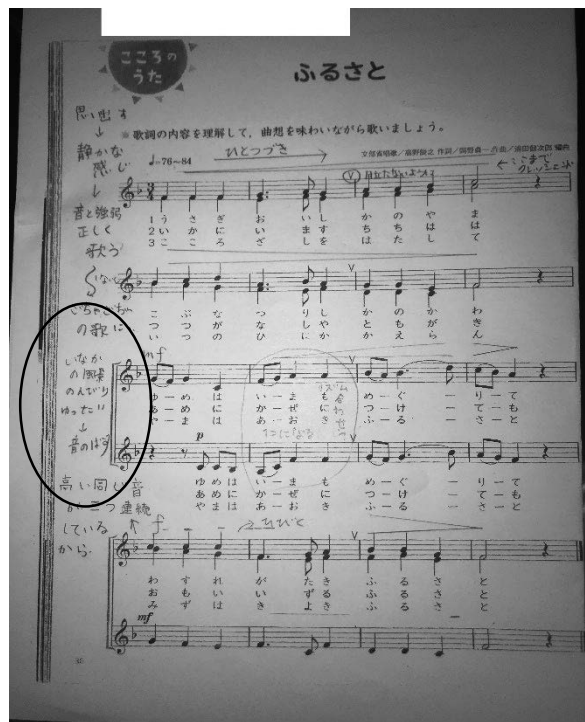
4 研究の考察

「音楽を形づくっている要素」を意識させて、楽曲の分析を繰り返したことで、「どんな曲?」という簡単な問いに対してでも「○○(要素)が」というように、まず主語に「音楽を形づくっている要素」を入れた発言ができるようになった。実際に、事後調査でも、音楽を説明する際に使う言葉の多様性に関する質問(問1)において、68%の児童が「音楽を形づくっている要素」を使って説明できるようになった。事後調査でも、実際の楽曲である「大切なもの」(本学年の児童が

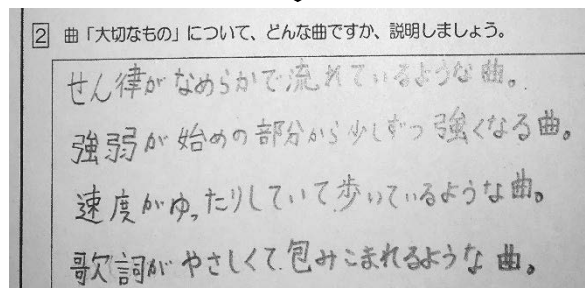
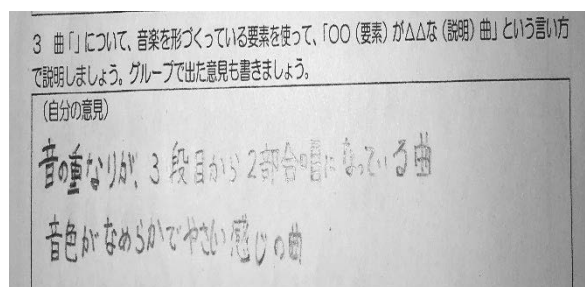
【資料9 話型に沿った表現】



【資料9 児童の楽譜への書き込み】



【資料11 Aの実践前と実践後の回答】



4年生のときに、卒業式歌として扱われた楽曲)を説明させた。その結果、「音楽を形づくっている要素」を用い、話型を意識して説明できる児童が73%に上った。実践前は24%しか要素を意識した曲の説明ができていなかったことを考えると、本研究における手だてを用いることに効果があったことがわかる(資料11)。このことから、楽曲の分析をするということは、要素を分析することだという認識が児童に定着しつつあると考える。

また、児童が表現の工夫を考える学習では、実践前には「気持ちをこめて歌おう」や「強弱を意識して歌おう」という意見にとどまっていたものが、歌唱練習に協働学習を取り入れることで、分析的に楽曲をとらえて練習できるようになった。要素や話型といった形式知を教授することで、楽曲をよりよく理解した協働学習が展開できる可能性を示唆していると考ええる。

5 今後の課題

事後調査における問2において、「旋律の音が○○のときに強弱が○○になる」というような複数の「音楽を形づくっている要素」を組み合わせる楽曲を説明した記述がみられなかった。複数の「音楽を形づくっている要素」を組み合わせることは、更に深く楽曲を理解できることにつながり、楽曲を豊かに表現する手段の習得につながると考える。本研究において明らかにした「形式知の教授」による分析力向上が、この点に関しても適用できるかどうかについて、引き続き検討する予定である。

また、グループで話し合うことが目的化され、話し合った内容について、音を出しながら試行錯誤するという活動が少なかったことも、課題としてあげられる。この点についても、より効果的な方法を検討する予定である。

〈参考文献〉文部科学省(2008)小学校学習指導要領解説音楽編。文部科学省